

古びた扉を開けて、デュバルは眉をしかめた。

冷たい外の空気がなだれ込む室内には、大勢の先客がいた。

そこは普通の、つまり健全に旨い酒を吞ませてくれる酒場ではなかった。一癖二癖はありそうな男たちがたむろする、いわゆる賭場だ。

新参者の訪いに、淀んだ空気がざわりと泡立ち、剣を帯びていることを目ざとく見つけた者たちが、殺気を叩きつける。見知らぬ顔、そして武器を持つ相手へのあからさまな威嚇はそこに集う男たちが何がしかの凶状持ちであることを告げていた。

すぐに無表情を取り繕ったデュバルは、平然とした動きで人の少ないカウンターへと歩み寄る。すねに傷持つ相手に怯えたりうろたえたりするのは禁物だ。武器を持つ者をただの旅人と見なしてくれるはずはなく、下手をすれば生命に係わることを彼は知っていた。

重要なのは、要注意人物だと思われぬこと。同じ世界に住む害のない存在だと認識させることだ。

驚きを一切匂わせず、慣れた足どりで空席に腰を下ろすことで、それはおおよそ成功した。刺すような視線が幾分か和らいだのがその証拠だ。

まだいくつかの視線が無遠慮に向けられているが、それは警

戒心より好奇心が勝ったものだろう。

少し伸び気味の黒髪に、色あせた外套。旅人としてはありふれた姿ではあるが、デュバルの体格は細身の部類に入る。携えた剣こそ不釣り合いなほど立派だが、筋力があるとも思えない優男が持つていては逆に身の程知らずの印象を与えるらしい。

害なしと下された評価に甘んじたまま、空いた席に腰を下ろす。

「麦酒。あとつまみを何か適当に」

「旅の人かい？ 見ない顔だけど」

「ああ、さつき着いたばかりだ。ここは、賑やかだな」

注文とほとんど同時に置かれたグラスに口を付け、答えた。

「この街に用なのかい？」

「いや、特にこれといった用はない。ただ少しばかり懐が寂しくなり始めているから、何か仕事があればしばらく腰を落ち着けてもいいとは思っている」

「手に職でもあるのかい？」

「職…、というには心許ないが」

デュバルは傍らに立掛けた剣にちらりと視線を落としてみせた。

「これくらいしか取得はないな」

「だったらあんた、運がいいよ」

店主は意味ありげに笑い、視線を店の奥へ向ける。

「このあたりはドレドさんの仕切りになってる。あの人の眼鏡に適えば、それなりの仕事にありつけるんじゃないか？」

「そのドレドさんってのは、どの人だ？」

同じく視線を背後の賭場に向けたデュバルが問う。店主の口調から、このあたりを仕切っているという男がここにいることは理解できた。

「俺だよ、若いの」

ざわつく店内でもしつかりその会話を拾ったらしい男が手を上げた。右に左にと金がやり取りされるテーブルよりも奥で煙草を燻らせていた男だ。着飾った女たちを左右に侍らせている。どこかだらしのない印象を与えるのは、彼女たちが商売女だからだろうか。

「仕事が欲しいって？こつちに来て顔を見せろよ」

指先ひとつで差し招く態度に不快感を覚えたことは綺麗に押し隠して、デュバルは腰を上げた。

「こころじゃ見ねえ顔だな、兄ちゃん」

「腕は確かなのか？」

「そんな細身じゃ、剣を握るより他のモン握る方が楽に稼げるんじゃないのか？」

投げかけられる揶揄を聞き流して、男の前に立つ。

「ふてえツラしてやがるな」

ヤニに黄ばんだ歯をむき出して、ドレドはにやりと笑った。

「おどおどしねえのはいいコトだ。腕に自信があるって訳だ」

「それなりに。今のところ殺されたことはないモンで」

わずかに目礼したデュバルの返答に、男は今度こそ声を出して笑った。

「減らず口叩くじゃねえか、小僧。仕事が欲しいなら世話してやれないコトもねえ。その前に、ちよいと運試しといかねえか？」

「運試し？」

「カードだよ。運がありやあ、仕事の前に懐があつたかくなるぜ」

煙草をもみ消したドレドが身を乗り出す。

「どうだ、乗るか、兄ちゃん？」

それと同時に、ドレドを取り巻く女たちが、そして周囲でやり取りを聞いていた男たちが、一斉に笑った。まるで、良いカモが見つかったとでも言わんばかりだ。

何かしら、彼には分からないルールなりが存在するのだろう。新参者をカモにしたのしんでやろうという気配がありありと伝わってくる。

賭けに乗ることに、積極的な得があるとは言えない。ここで勝負を受けなくても、ただこの街で稼ぐ手立てを失うだけだ。

対して、相手にはいい暇潰しの材料というだけでなく、デュバルに対して貸しを作れるチャンスがある。デュバルが大負けすれば、対等の契約ではなく借金をカタにした只働きを強要することも可能だ。

その様子に内心警戒を強めながら、デュバルはあえて横柄に視線を投げるだけだった。

安全を取るなら、誘いを断ることが上策だ。負け犬だとか弱虫だとかあざけりの対象にはなるだろうが、元々流れ者の身と

してはそんな評価は痛くも痒くもない。

けれど。

デュバルはあえて双眸をすがめ、笑った。

正直なところこの街で厄介ごとを起こす気はなく、この盛り場に足を踏み入れたのはただの偶然だ。それでも、これくらいの人数ならば剣一本で切り抜かれる程度の自信は持っている。下手な小細工で取り込もうとするなら、蹴散らせばいい。

そもそも扉を開けた瞬間に殺気をぶつけられたことで、気が立っていたのだ。

「面白そうだ、乗ろう」

応じたデュバルの声に、室内は一層沸き立った。

「いい根性だ。おい、テーブルをどけろ！」

ドレドが片手を振る。

左右に待っていた女たちが手早くテーブルを片付け、いすが一脚、ドレドの正面に据えられる。

「何で勝負するんだ？」

「カードだよ。俺とお前の一对一だ」

他の物のなくなったテーブルの上に、一組のカードが置かれた。

デュバルは片手に剣を掴んだまま、臆する様子も見せず椅子に腰掛ける。

「お前が切れ」

デュバルに向けてひとつ顎をしゃくつてから、ドレドは片手を挙げた。

「サンシエ！」

「……は？」

周囲のざわめきに掻き消えそうな声が、応じた。カードを手にしていたデュバルは顔を上げ、わずかに瞑目する。

「サンシエ、酒持って来い！」

そう怒鳴る声に怯えたようにして店主に近付くのは、小柄な少女だった。まだ十歳かそこらの年齢だろう。

ドレドが側において可愛がっているというには、サンシエと呼ばれた少女の様子は明らかに不自然だった。

紫煙に黄色く烟った室内でも分かるほどの鮮やかな金髪よりも、そのみずぼらしさが先に目を引く。

洗いざらしの服から覗く腕は細く、筋張っている。合わない靴を引きずるようにして歩く足も、折れそうに細い。満足な食べ物も与えられてないようだ。

店主から受け取ったグラスを危なっかしい足どりで運ぶ姿は、いつそ見ていられない。

「どうだサンシエ。今度の客は？」

太い腕を伸ばしてグラスを掴んだドレドが、そう問うた。少女はびくりと肩を揺らしてから顔をあげた。

いぶかしんでいたデュバルの視線が、少女のそれと正面から絡む。怯えを色濃く宿した双眸が揺れる。右目は海のように澄んだ青。左目は——白く濁っている。

「どうだ？」

ドレドの問いに、少女は色のない唇を開いた。ぼそぼそと動く唇からもれる声は、小さすぎて聞き取れない。

「ふん、まあまあか」

鼻を鳴らしたドレドが下がれといわんばかりに腕を振る。少女は危なっかしくふらりと揺れて、人垣の向こうに消えた。

「さあ客人。始めようか」

正面に向き直ったドレドが、黄色い歯をむいて笑った。

少女から意識を戻したデュバルは、手早くカードを切って小山に分ける。手持ちカードを配り終え、胸ポケットからコインを一枚取り出し、机に置いた。

手札と相手の表情を見比べて、デュバルは眉をひそめた。机の上のコインは、そろそろ山を作り始めている。手札の柄は悪くない。むしろ好手の部に入るものだ。

それでも、一気に攻めに行こうという気がどうしても起きない。

カード勝負の肝は、どれだけ好い手札を揃えるかよりも、どれだけ相手の裏をかくかにかかっている。弱い手ならどうにかして掛け金の少ないまま切り抜けるか、強い手ならいかにして相手により多く賭けさせるかということにかかっている。

デュバルの勘は、これ以上相手に乗ることに對して警告を発

していた。

「悪いが、降りる」

自身の勘を信じることにしているデュバルは、規定のコインを上積みし、あっざりとしてカードを放った。手札のないようにかかわらず、先に降りた方が負けのルールだ。デュバルはコインの山を相手に押しやった。

「ほう？ 思ったよりも臆病だな」

「そうでもないさ。ヤバイと思ったら引くのが信条なんでね」
あっざりとした口調で応じながら、デュバルはさりげなく相手の表情を窺った。勝って喜ぶ様子を見せながら、わずかに苛立ちの気配が漏れている。もう少し多く取れるものだと思っていたのに違いはないだろう。

「どうだ、もう一勝負？」

誘いをかけられ、デュバルは頷いた。ここで席を立つのは面白くない。

「そこなけりやな！ おい、サンシエ、酒だ！」

上機嫌に呼ばわったドレドが、散らばったカードをわし掴んだ。